

# 論文の和文要旨

論文題目

モノ・コト主語の使役文の諸相

氏名

崔瑞暎(チェソヨン)

本稿は、現代日本語の使役文のうち、「モノ・コト主語の使役文(それと同じ意味構造を持つ、モノ・コト同様の人主語の使役文も含む。以下同様)」に注目し、その構造と意味について考察しようとするものである。

使役は、「XがYに/を(Zを)V-(s)aseru /-(s)asu」の構文をとり、典型的には、〈先生が生徒たちに、教室の掃除をさせた。〉のように、意志主体としての人が指示・命令をして人に意志動作を行わせることを表す。それに対して、〈飢餓に瀕している子供たちの写真が、私を悲しませた。〉のようなモノ・コト主語の使役文は、〔主語〕と〔補語＋述語〕が、〔原因〕と〔結果〕の関係で結ばれ〔因果関係〕を表すとされる。前掲した例では、「飢餓に瀕している子供たちの写真」が原因になって、「私が悲しむ」という結果(人の無意志的な状態変化)を引き起こしている。同じ使役構文をとっていても、典型的な使役文とモノ・コト主語の使役文とでは、主語の意味役割(意志的な主体 vs 原因)、主語の補語に対する働きかけ方(指示・命令のような要求的な働きかけ vs (主に)人の生理・心理に作用)、述語事態の性質(意志動作 vs (主に)無意志的な状態変化)のような点で大きく異なる。

モノ・コト主語の使役文は、その発展・定着の歴史が浅いことや出現頻度が低いことから、これまで使役文の研究ではほとんど考察がなされていなかった。そのなかで、佐藤(1990)は、モノ・コト主語の使役文について詳細に考察されたほぼ唯一の先行研究として非常に貴重なもので、本稿では、その佐藤(1990)に多くを学びつつ、そのうえで佐藤(1990)では指摘されていない問題や具体的に検証されていない問題を取り上げて考察した。

本稿は、全6章から構成されている。以下では、各章に沿って内容の概略を述べる。

1章と2章は、序論にあたる。1章では、研究の目的および研究対象の基本的な性質について記述し、2章では先行研究を概観した後、研究対象の使役文全体のなかでの位置づけ、研究の学術的な位置づけについて述べた。以下では、本論の各章(第3章～第6章)の内容の概略を述べる。

まず、第3章では、モノ・コト主語の使役文(モノ・コト同様の人主語の使役文を含む)における、原因と結果の種々のありかたについて考察した。従来の研究では、モノ・コト主語の使役文が表す意味について、因果関係を表すという指摘はされていたものの、〔原因〕と〔結果〕との具体的な様相についてはほとんど述べられていなかった。3章では具体的に、どのような〔原因〕がどのような〔結果〕を引き起こすかという問題に正面から取り組み、モノ・コト主語の使役文が表す因果関係の中身と特徴を明らかにした。

まず、モノ・コト主語の使役文では、〔主語—補語〕が、「モノ・コト一人」である組み合わせが全体の約89.44%と圧倒的に多く、「モノ・コト—モノ・コト」である組み合わせはわずか約8.91%を占めている。モノ・コトのなんらかの属性が原因になって、人の身の上に引き起こされる結果事態には、「心理的な変化(約87.34%)」「生理的な変化(約4.77%)」「社会的な変化(約2.49%)」「動作(約2.92%)」のようなタイプが見られる。人が意志的・主体的に行う事態ではなく、何らかの原因によって誘発される無意志的な状態変化が中心になっているのである。このうち特に、心理的な変化を引き起こすタイプが、(人が補語であるタイプ)全体の約87.34%と、圧倒的多数を占めることには、次のような理由が考えられる。

心理的な変化は、人間固有の現象として、人間の受け入れ方の多様性が際立つ領域であり、その原因は特に多種多様であるといえる。というのは、たとえば〈太陽が暑さを感じさせた。〉のような生理的な変化では、「暑さを感じる」生物体としての人の性質が問題になるが、太陽光線を受けると、人ではない他の動物も同様に感じ得るなど、人間固有の現象とは言いにくく、原因となるものも、人の身体・生理面に作用し得るものに限定される。社会的な変化の場合は、人間固有の領域といえるが、自然現象が原因になって引き起こされるということはそもそも想定しにくく、社会的な位置・立場の変化や人間関係の変化など、表現される領域自体が狭い。それに対して、心理的な変化は、原因が多種多様であるだけでなく、人それぞれの様々の受け入れ方が発現しその人らしい個別性をもっとも現れやすい領域であり、そのため、出現頻度も高いと思われる。

次に、第4章では、モノ・コト主語の使役文(「モノ・コト同様の人主語の使役文」を含む。以下同様)における「原因の表現形式」について考察した。従来、モノ・コト主語の使役文における〔主語〕と〔補語+述語〕は、〔原因〕と〔結果〕の関係で結ばれるとされていたが、主語だけが原因を表すわけではない点、また、主語が原因を表す場合でも、主語が単独の名詞の形で原因を表すことは稀である点に、指摘すべき大きな問題点があった。このような問題意識から4章では、モノ・コト主語の使役文で原因に

あたるものは文において具体的にどのように表現されるのかという、原因の表現形式の様々と、そのように原因が表現される理由について考察した。

具体的な原因の表現形式としては、原因が使役文中に現れているか否か、現れている場合はどのような形式で現れているかを基準にし、①連体修飾要素＋主名詞(例：自分が失禁した汚物を見るよりもなお耐えがたい恥の感覚がぼくを発熱させた。)、②指示詞や、指示詞＋主名詞(例：それは彼女の体をじりじり衰えさせた。)、③単独の名詞(太陽が太郎を暑く感じさせた。)、④従属節(例：三時間めの板木がなるとともに行進曲にかわり、みんなの足どりをうきたたせた。)、⑤「で」格補語(例：ただの事故ではなく、私の知らない女性と心中しようとしたのだということ、事の真偽を疑わせた。)、⑥分裂文の述語部分(例：一層伊木を戸惑わせたのは、朝子の様子であった。)、⑦使役文中には現れていない場合、のような種々のタイプと、実際の用例におけるそれぞれの分布を示した。全体を通して、モノ・コト主語の使役文とモノ・コト同様の人主語の使役文では、様々の要素によって、原因が詳述されるのが大きな特徴といえる。

第5章では、第4章で浮上した新たな課題として、使役文の主語における「連体修飾要素と主名詞」の問題を掘り下げて考察した。4章の考察で、モノ・コト主語の使役文では、原因を表現する種々の形式のうち、「連体修飾要素＋主名詞」がもっとも多く見られる形式であることを述べたが、なぜ主語は連体修飾を受けて現れやすいのか、また、他のタイプの使役文の場合はどうであるか、のような問題が課題として残されていたのである。

具体的に述べると、意志的な人主語の使役文では、主語が連体修飾を受けるものは、主語明示例の約9.30%に留まり、他の90.7%の例は連体修飾を受けていない。それに対して、モノ・コト主語の使役文では、主語が連体修飾を受けるものが、主語明示例の約73.56%にも上る。

主語が連体修飾を受ける割合に大きな差が見られる現象をめぐって、意志的な人主語の使役文については、連体修飾要素の必要度が低い理由として、第一に、「僕」「ピカソ」「患者」のような人名詞は、単独でも文成分として自立的に用いられる名詞であること、第二に、意志的な人主語の使役文における人主語は、指示者や許可者としてのポテンシャルを有し、何らかの意志動作を引き起こす能力が想定可能になっているため、ということが挙げられる。

モノ・コト主語の使役文については、連体修飾要素の必要度が高い理由として、第一に、モノ・コト主語のなかには、「こと」「の」のような形式名詞をはじめ、「事実」「もの」のように単独では使役文の主語として用いられにくいものがあること、第二に、意志のないモノ・コトがなんらかの事態を引き起こすことを表現するためには、事態の生起と密接に関わるモノ・コトの属性を詳述する必要があること、が挙げられる。すなわち、連体修飾要素は、述語事態の生起と関わる属性を示すが、それは、文の自然な成立を左右するほど重要な情報であるため、欠いてはならない要素となるのである。

第6章では、ある文が、「特定の時間に生起・存在する個別的な事態を叙述する」のか、「特定の時間に縛られない主語(あるいは主語相当のもの)の性質を特徴付ける」のかという、叙述の種類の観点から、使役文のタイプ別の特徴について考察した。

具体的に述べると、主題化の有無、補語の特定・不特定性、述語のテンスのような構成要素の性質が、構文的な条件に支えられ、特定の時間に生起・存在する個別的な事態を叙述する「事態叙述型」と、特定の時間に縛られない主語の性質を特徴付ける「特徴付け型」という、構造的、意味的に異なる2類型が設定できることを明らかにした。

考察においては特に、今まで使役文の研究では述べられていないこととして、「特徴付け型」の存在を指摘・分析することに焦点をあてた。特徴付け型は、意志的な人主語の使役文では、わずか約0.84%に留まるが、モノ・コト主語の使役文とモノ・コト同様の人主語の使役文では、全体の約22.96%、約12.63%を占めるものとして、モノ・コト主語の使役文とモノ・コト同様の人主語の使役文のほぼ固有の表現領域といえるのである。特徴付け型は、典型的には、「Xハ ～サセル X ー デアル(例：暗闇は人を怯えさせるものである。 )」、「X(二)ハ ～サセル xガ アル(例：暗闇には人を怯えさせるものがある。 )」、「Xハ ～サセル(例：暗闇は人を怯えさせる。 )」、「～サセルX(例：～人を怯えさせる暗闇)」のような構文で現れる。

以上、本論の各章の内容を概観した。